



第8回 おわりに(開かれた養育を目指して)(1)

はなの家は、社会的養護を必要とする子どもたちのための生活の場である。

ここでの生活に慣れてくると、子どもたちはこれまでのさまざまな体験を語りだす。(なぜか夕食時に多い)「給食が唯一の食事だった」「いつ食事になるかわからなかった」「金属バットで殴られた」「いつでも逃げられるように窓の外に靴を置いていた」「クリスマスやお正月はなかった」「お雑煮食べたことがない」「お年玉をもらったことがない」「ディズニーランドに行ったことがない」「お母(父)さんの顔を見たことがない」「映画館に行ったことがない」等々。

世の中の多くの子どもたちにとってのありふれた日常からは、かなりかけ離れた状況だったことが手に取るようにわかる。子どもたちはいろいろな思いを胸の奥に抱えながらも、学校にも行き、勉強や部活動にも必死に頑張ろうとしている。頑張っています！！

私たちにできることは、子どもたちが「頑張れる」環境を少しでも整えて、時に導き、背中を押し、時に立ちはだかりながら、同じ時代に生を享けた仲間として、ともに生きていくことなのかも知れない。

季刊「児童養護」2018 Vol.49 No.3 掲載

